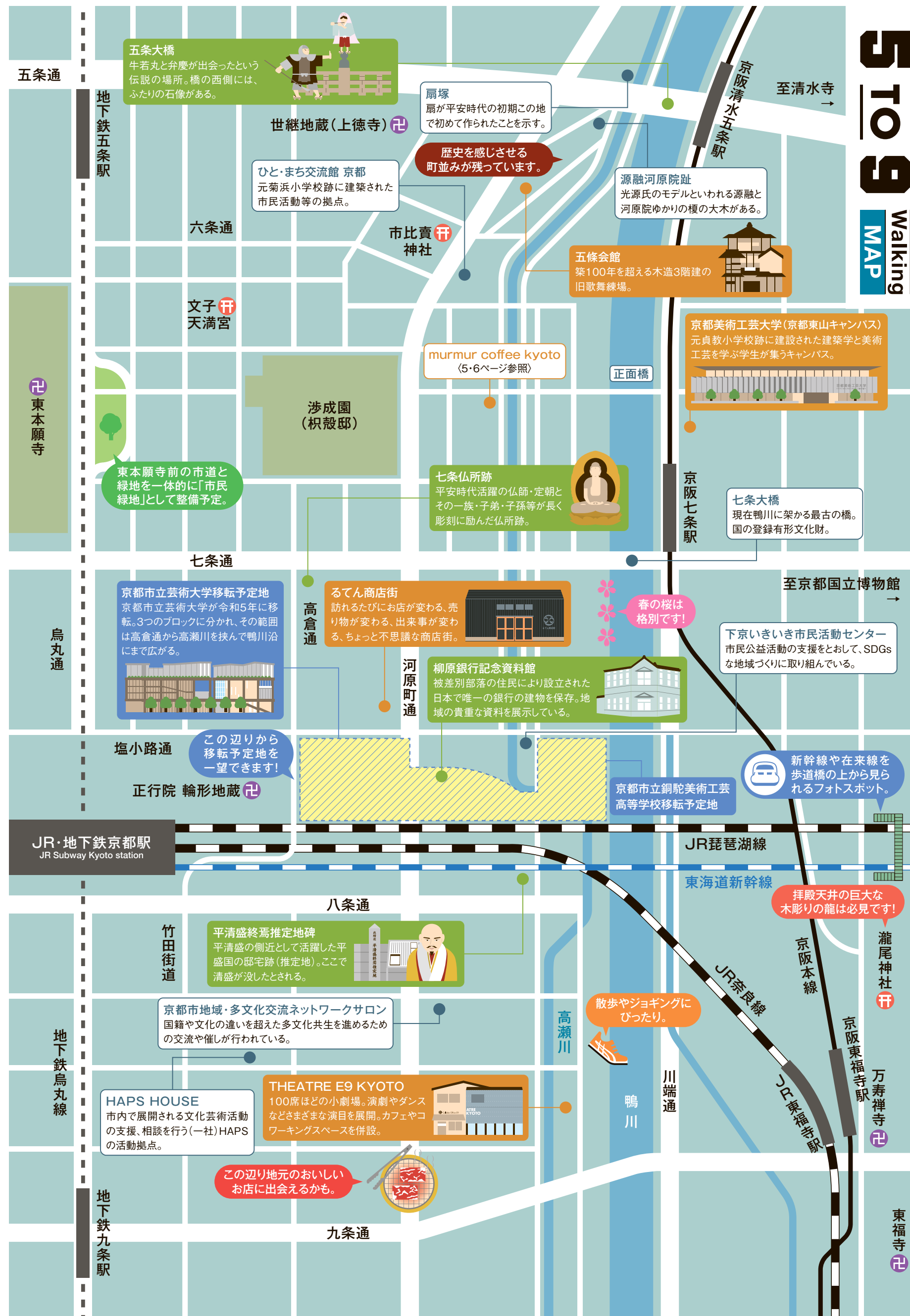


／お散歩しながら、このまちの文化と出会おう。／



京都駅東部エリアのカルチャーを発信。／5to9(ゴートゥーナイン)／ プロジェクトマネージャー | 桜井 肖典 (RELEASE) 編集 | 森田 利浩 (実業広告社) 編集協力
あこうさとし (アーテシード京都)・小山田 徹 (京都市立芸術大学)・田中 都后 (曙灯舎)・清 三次郎 (梅瀬)・山内 一正 (仄孝本店・murmur coffee kyoto) 執筆 | 高島 夢子
(editplus)・立原 里穂 アートディレクション・デザイン | 野田 幸弘 (実業広告社) 撮影 | 鈴木 誠一・秀平 琢磨 印刷 | 株式会社シーズクリエイト 京都市印刷物 第
023171号 (令和3年1月) 発行 / 京都市総合企画局プロジェクト推進室 TEL.075-222-3176 (土、日、祝を除く 午前8:45～午後5:30) FAX.075-213-0443
*本誌記載内容の無断転載は御遠慮ください。



京都駅東部エリアのカルチャーを発信。

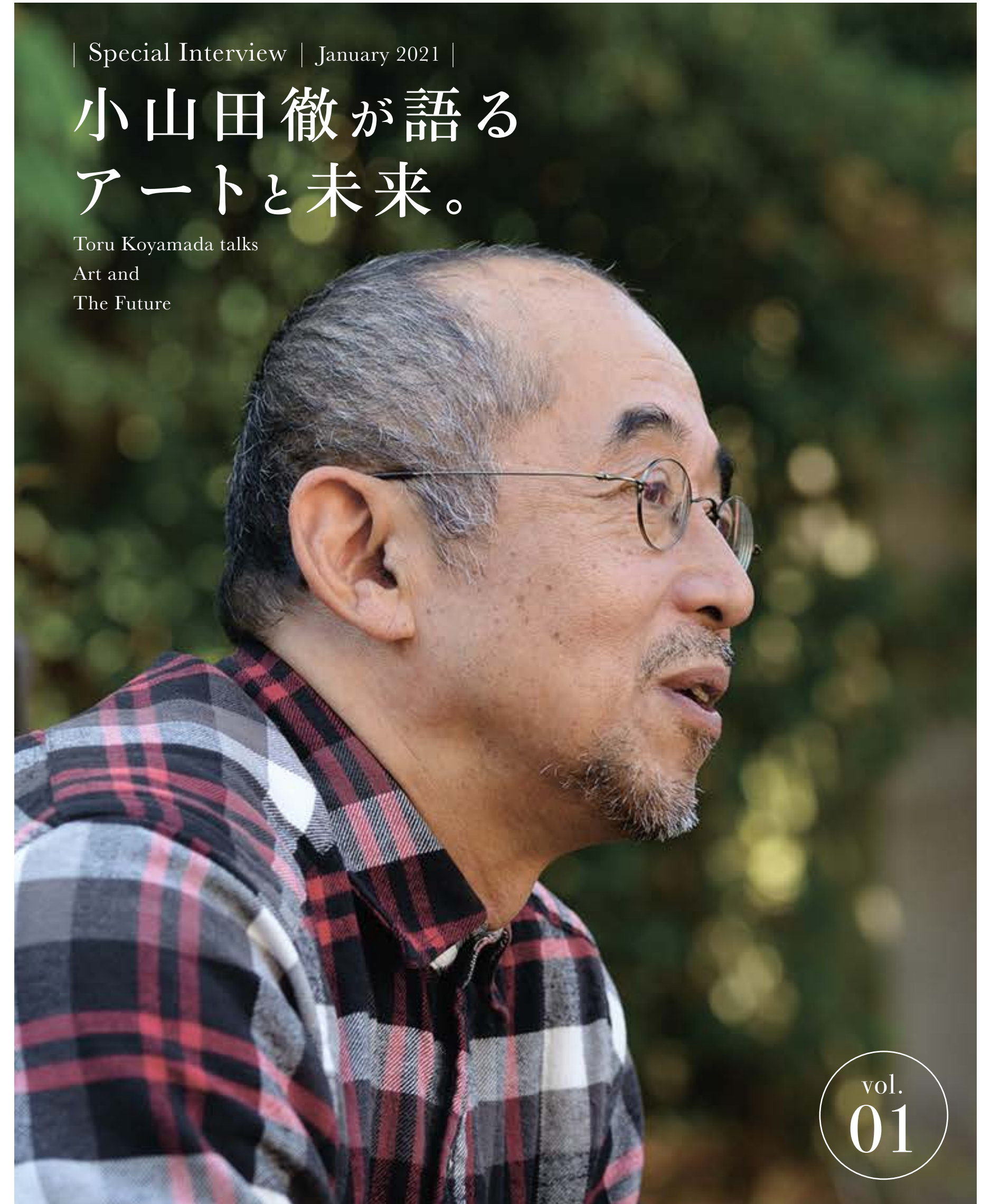
5 to 9

KYOTO East side Gojo-dori St. to Kujo-dori St.
CULTURE JOURNAL

| Special Interview | January 2021 |

小山田 徹が語る アートと未来。

Toru Koyamada talks
Art and
The Future



vol.
01

Special Interview

昆虫大好き少年だった 僕が芸術の道に 進むまで。

令和5年に崇仁地域への移転を控える京都市立芸術大学の美術学部彫刻専攻の教授であり、パフォーマンスグループDumb Typeの旗揚げメンバーとしても知られる小山田徹氏。「中学校に入るまでは美術とは無縁の昆虫大好き少年だったんですよ。中学2年生の頃に、27歳くらいの新任の女性の先生に出会ったのが美術を始めた大きなきっかけですね」。小山田氏の通っていた中学校には美術部はなかったため、その日を皮切りに、先生と2人だけの「秘密の美術部」がはじまった。「その先生との出会いがなかったら美術の道はなかったです」。

勉強は全くせず、先生との美術の時間にどっぷり明け暮れていたという小山田氏。「おかげで高校受験は失敗。浪人して入学した高校の美術部ではジャンルを問わず、いろいろなことを教えてもらいました。地元・鹿児島には、美術の大学に進もうとしている学生たちの、情報交換や訓練の場が全くなかったので、一軒家のアトリエを借りて、県下の学生たちが毎日通える美術の私塾を作ったんです」。以降、鹿児島から美術系の大学に進むほとんどの人がそこに通っているのだそう。「この私塾ははじめての人の集まる場づくりの経験で。いろいろな人が通う場所を作るには責任が付いて回るということを実感しましたね」。

Dumb Typeに 捧げた青春時代。

先輩に導かれる形で京都市立芸術大学に進学した小山田氏にさらなる影響を与えたのは、演劇との出会いだった。「日本画科に入学したんですけど、日本画はからっきしで。それよりは新しく始めた劇団「座カルマ」の活動の方が楽しくて夢中になっていましたね」。劇場演劇に映像やダンスなどを組み込んだ、80年代初頭に台頭した新しいアートに、心を奪われた当時の小山田氏。「当時の演劇界は演出家がいって、スター俳優がいて…みたいな階級社会だったんです。だから、僕らは上下関係なしに、アイデアを出し合って、言い出した人がその役割を担うことにしました」。このようにして劇団「座カルマ」は当時の演劇界への警鐘を鳴らす意味も込め名付けたDumb Type（※セリフや言語のない型の意）に名称を変え、その活動が現在まで受け継がれている。

君らが試みていることは “未来の当たり前”を つくるためのこと。

現在は京都市立芸術大学の教授として、テクニクとしての彫刻だけでなく、社会に関わるものを創ることも“表現”として捉える「社会彫刻」の概念も教えている小山田氏。「学生たちには、簡単にアートを生かせる仕事はない。ほかの仕事をしてもいいから、なんらかの形で美術を考え続けたり、体得し続けたりしてほしい。むしろ、日々の生活や仕事、遊びの“隙間”に美術を見つけてほしいと伝えている」。

また「合わせて、学生には『今君らが試みていることは“未来の当たり前”を作るためのこと』だとよく言っています。今はまだ異質であったり、理解者が少なかったり、自分でも疑問を抱いていたことも多いと思うんだけど、少なくとも20年先には、世の中がそれを当たり前として捉えて、その中で子どもたちが育っていき、その子どもたちがまた新たなものを作り出していく…と、そういう繰り返しの中にあるんじゃないかと」。

「何かが変わるとき、その瞬間に変わるものは一切なく、突破者がいて、さまざまな抵抗や葛藤

があり、ある程度の定着期間があるのだ」と小山田氏は話す。「教育者である僕らは技術とか知識とかを翻訳して学生たちに伝えていく役割です。学生たちにはいろんな経験をしてほしいけど、結果が出るまでにはほんまに時間がかかるから、めげないでほしい。周りの人々や社会も結果を急がないでほしい」。

結果が出てきたら 「私たちが育てましたよ」と。

京都市立芸術大学の崇仁地域への移転にも通じるところがある。「京都は長らく学生の街として、ほかから流入してきた学生を受け入れてきている。そして、京都人にはその子らを冷ややかに放っておき、結果が出てきたら「私たちが育てましたよ」と上手に組み込むしたかさがある。京都大学だって、百万遍で受け入れてもらえるのに100年以上かかっているんですから、すぐに受け入れてもらえるなんて思っていない。しかも美術は60～80年先を見据えた学問。長い目でじっくりと付き合うための方法を一緒に考えませんか、というのが迎えてくださる地域の皆さんへのお願いですね」。



Profile

こやまだとある

小山田徹

〈京都市立芸術大学 美術学部教授〉

—

1984年京都市立芸術大学日本画科在学中にパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。ダムタイプと並行して1990年からは、様々な共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アートスケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画を行うほか、コミュニティカフェ「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加。

すぐに受け入れてもらえる

なんて思っていない。

60～80年先を見据えて、

長い目でじっくりと

お付き合い願いたいですね。

5 to 9 京都駅東部エリア ≪「移りゆくまち」≫ プロジェクト



京都市立芸術大学教授
 こやまだ とおる
 小山田 徹

「まちの未来の姿を広げ、想像してみよう」



京都市立芸術大学が、2年後の令和5年に京都駅東部エリアへ移転してくる。移転予定地にあった建物はすでに解体され、広大な更地は工事フェンスで覆われている。大学の移転事業はすでに動き始めている。

この大きな出来事とともに変わっていくまちの未来について、京都市立芸術大学教授の小山田徹氏と五条から九条までの高瀬川エリアで活躍する事業者の皆さんが一堂に会しディスカッションを行った。

メンバーからは、「地域と大学との化学反応に期待する」、「アートをととして高瀬川沿いのお店にもつながりが生まれる」、「音楽が聞こえてくる」など、「まちのなかで芸術が身近に感じられるようになっていくとよい」、「このエリアが、未来を背負う子どもたちの居場所となり、芸術にも触れあえる場所になってほしい」などの意見が出るなか、小山田氏からは、「櫓のような高いところから京都市立芸術大学の移転予定地を定点観測できないかな」という発想が。「今しか見られない風景を地域のアーカイブ（記録）として残すことにつながるし、なにより、その映像を発信することで工事現場を囲む“壁”の向こう側を地域の方に知ってもらうことができる」と続けた。

この意見を受け、他のメンバーからも「大学の周辺が変わっていく様子も収めるとより良いかも」、「変化を記録し、記憶に残すことは大切な価値ある試み」、「この記録を題材にしたアート作品を通じて、未来の姿を想像したり、今ある現実を拡張

できたら面白いのでは」と、想像の世界は身近なものにカタチを変えていく。
 そこで「5to9」では、“壁”の向こうにある移転予定地、そして街の移りゆく風景を地域の方々にも広く目に見える形でお届けする「京都駅東部エリア「移りゆくまち」プロジェクト」を進めることに。

今後、京都市立芸術大学の学生や卒業生など、若いアーティストたちが京都市立芸術大学移転予定地の映像等を題材にしたアート作品を制作していきます。「5to9」では、制作過程や完成した作品の展示など、このプロジェクトの進捗を追跡し、発信していきます。



京都市立芸術大学
 移転予定地の

BEFORE AFTER



A 地区

施設
 美術学部・グラウンド
 京都市立銅駝美術工芸
 高等学校など
 地上3階・地上4階

B 地区

施設
 食堂・美術学部など
 地上5階

C 地区

施設
 音楽ホール・ギャラリー
 図書館・芸術資料館
 音楽学部・美術学部など
 地上7階・地下1階



5 to 9

街のあの人、あの場所へ。

下京区内の16箇所のショップ等を巡りながら日常の場でアートを体感できる「SHIMOGYO+GOODまちなかアートギャラリー」(令和2年12月18日～令和3年1月17日)に参加した、“murmur coffee kyoto”(西木屋町通正面下る)の店主・山内一正さんと、作品を提供したアーティストの大原一恵さん。イベントが終了した後も作品を展示するなど、交流を続けるお二人にお話をうかがいました。

——平成28年、高瀬川沿いの絶好のロケーションにオープンした“murmur coffee kyoto”。このカフェをオープンしたきっかけを教えてください。

山内さん

カフェの前を
流れる高瀬川
はかつて

京都市中と伏見をつなぐ舟運で賑わった運河でした。私は明治18年創業からこの地で建材を扱ってきた株式会社灰孝本店の代表でもありますので、歴史的な風情が残り、木の葉のざわめきや、小川のせせらぎを感じることできるロケーションをまちづくりに活かせないか。そんな思いが“murmur coffee kyoto”の原点でしたね。



大原さん

私はもともと
“murmur coffee kyoto”の
ファンのひとり

でしたので、今回「SHIMOGYO+GOODまちなかアートギャラリー」の展示候補の中に見つけて、いち早く企画サイドに「こちらで展示したいです!」と、リクエストさせていただきました。最初に訪れたのは、デザイン系企業への就職を機に、下京区に引っ越したばかりのころ。慣れないことばかりでへとへとなりながら、ふと見つけたのが“murmur coffee kyoto”さんでした。自然と調和したナチュラルな雰囲気、店員さんの笑顔にすごく癒されてから、いつしか私の大好きな場所に。店員さんと地域の方が仲良くて、距離が近いのもいいあって。地域に寄り添っている、そこもとても気に入っています。

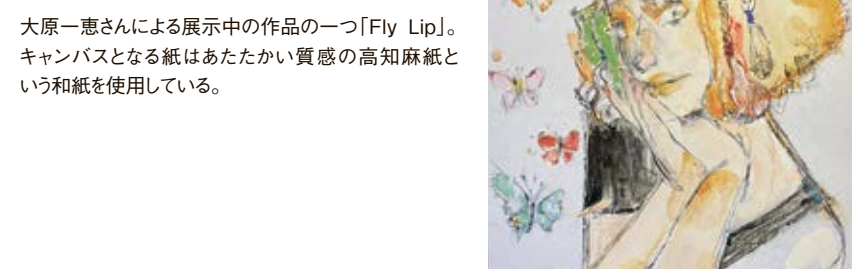


——大原さんは、京都市立芸術大学の出身で、日本画を専攻されていたとか。「SHIMOGYO+GOODまちなかアートギャラリー」では、“murmur coffee kyoto”という場所から着想を得て、作品づくりを進められたそうですが。

大原さん

カフェに来る
お客さまに癒やしを
届けることを心がけました。

キャンバスとなる紙もあたたかい質感の高知麻紙という和紙を採用しています。現職はCGデザイナーですが、もともと私には職人気質などところがあり、手を動かして作品をつくるのが好きなので、作家として“素顔”の自分にもどって手書きで描きました。



大原一恵さんによる展示中の作品の一つ「Fly Lip」。キャンバスとなる紙はあたたかい質感の高知麻紙という和紙を使用している。



山内さん

大原さんのように夢を持った
若いアーティストの方々を
応援できれば、こちら嬉しい。

「SHIMOGYO+GOODまちなかアートギャラリー」でのご縁をきっかけに、これからもアーティストの発表の場として自由に使っていただきたい。令和5年度に、京都市立芸術大学が京都駅東部エリアに移転してくるということで、学生の皆さんにも表現の場としてカフェをギャラリーとして使ってもらいたいですね。アートと地域をつなぐ場所としてこの街でカフェを営む私としては、彼らを受け入れそっと見守っていきたいと考えています。

——“murmur coffee kyoto”では、京都美術工芸大学の学生さんにコーヒーカップの制作を依頼するなど、これまでもアーティストと一緒に地元を盛り上げる活動をされていますよね。

山内さん

正面橋、
高瀬川の舟とオール、
せせらぎと桜などを

テーマにした、カフェで使用しているカップは学生さんの作品です。コーヒーカップで、伝統工芸と日々の生活とをつなげることができるのではないかと制作をお願いしました。京都には京都の流儀があって、あまり目立ちすぎでは地元に受け入れてもらえない。地域にスッとけこみやすいものがいい。うちのカフェもお客さまにとって馴染みやすい、空気のような存在でありたいと願っています。

大原さん

そのお考え、
すごく腑に落ちます。

今の時代、人より目立つものや誇張してみせることに若い人は敏感やと思うんですよ。でも、そればかりのお店って、ちょっと居心地が悪いというか。京都の人は古き良きものを愛しているし、どうやって残すか考え続けている。京都市立芸術大学が移転してくれば、ここから数年でおのずと景色は変わっていくでしょう。でも“murmur coffee kyoto”さんの地域とともにあるという本質は変わらないでしょうし、学生たちにとってもホッとできる場所であり続けていただきたいです。



京都美術工芸大学の学生が“murmur coffee kyoto”近くの正面橋・高瀬川をイメージして制作したコーヒーカップ。

